

## 就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果 と課題(2)大学1年生のインターンシップの場合

著者	下里 里枝, 谷口 一也
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	11
ページ	147-157
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000533/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000533/</a>

就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果と課題Ⅱ  
—大学1年生のインターンシップの場合—

A Study on the Effects and Problems of the Internship at  
Preschool Institutions Ⅱ:  
The Case of the Internship at University Freshman Level

下里 里枝\* 谷口 一也\*\*

Satoe SHIMOZATO Kazuya TANIGUCHI

抄録

就学前保育・教育施設へ就職したい気持ちがあって入学してきた学生が、卒業後の職業としてその気持ちをもったまま就職してくれるようなキャリア教育の一環として、このインターンシップⅠは重要な科目として捉えている。また、高校を卒業して間のない1年生にとって、専門科目を学ぶ必要性に気付くための体験の場でもある。

インターンシップⅠの実施前後に就職希望先を調査したところ、8割を超える学生が、保育士・幼稚園教諭を希望していることが明らかとなった。一方、その希望先は卒業時までに変化する可能性があると考えている学生が約半数いることも分かった。

昨今の就職先として保育士・幼稚園教諭を選択する学生が低い割合に留まっているなどの課題を踏まえ、インターンシップの体験を踏まえ、学生が自信を持って保育士・幼稚園教諭を目指せるような教育課程にする必要がある。そこで本稿では、インターンシップⅠの事前学修で取り組んだ内容を振り返り、今後の在り方を明らかにしたい。

I はじめに

大学におけるインターンシップに関して、2016年4月8日文部科学省、厚生労働省、経済産業省、関西国際大学は、2008年度より、「教育保育インターンシップⅠ、Ⅱ、Ⅲ」をそれぞれ単位認定の科目として位置づけ開講している。本年度は1年生の「教育保育インターンシップⅠ」において、環境整備（実習先の拡充）、キャリア教育・専門教育の視点からの教育内容の充実を行った。本稿では、この実施状況をもとに、幼稚園教諭養成課程、保育士養成課程におけるインターン

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

\*\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

シップの効果と課題について考察する。

## II 「教育保育インターンシップ I」の概要及び本年度の改善点

まず、関西国際大学「インターンシップ I」の概要について紹介する。

### 1. 目的

「インターンシップ I II III」の目標は、保育者をめざす学生が、学内での科目と関連させて、就学前施設で職場体験を行うことにより、保育者として必要な実践的能力を高めるとともに、自らの社会性や人間性を培うことを目的としている。「インターンシップ I」は、1年生であるので、まだ保育の専門的な講義を受けていないが、2年生の保育実習に行く前に、保育現場で職業体験を行い、社会人としてのマナー、法令遵守、守秘義務などについての理解を深める。また、保育者や子どもと触れ合い、保育現場に慣れ保育者の仕事の内容を知り、大学生活の課題や自分の適正を考える機会とする。などを目的とする科目であり、保育実習の効果をあげるためにも大きな教育的効果が期待される。

### 2. 内容

大学より振り分けられた保育所や幼稚園に行き、乳幼児の保育補助、保育教材の等の準備手伝い、保育室整理の手伝い、園内環境美化手伝い、幼児の個別支援の補助、園外散歩等の引率補助等を行う。また、実施時期は、学生が夏期休業中の8月・9月である。

### 3. 学内の講義とインターンシップの位置付け

学内講義を10回行った後に、学外インターンシップを3日、さらに事後指導として学内講義1回で構成されている。

### 4. 改善点

#### 4-1 インターンシップ先の拡充

インターンシップでは、学生一人が幼稚園・保育所のクラスに1名のみ配属されることが理想である。これは、2名以上の学生が同じクラスに配属された場合に、お互いに他の学生に頼ってしまう可能性が高まるためである。クラス担任や子どもとの関係性に関し、配属学生が一人であれば、自分で構築していくしかなく、担任からの指導も直接的で、よりの確な指導を得られる。このように、各クラスに1名のみ配属が理想であるが、昨年までの体制では、インターンシップ先が3園に限られていたため、その完全実施が困難であった。そこで、新たにインターンシップ先を2園開拓し、学生が個人的に依頼した園が2園と計7園に増えた。実施園と学生の人数は、当大学の系列であるT小規模保育園（参加学生12人）とS保育園（参加学生24人）、M幼稚園（参加学生11人）、N認定こども園（参加学生9人）、U保育園（参加学生2人）、H認定こども園（参加人数1人）、

T幼稚園（参加人数1人）の計7か園、60名の参加学生であった。全園に協力して頂き、各クラスに1名のみ配属が達成できた。池田（2009）は、「インターンシップ先の確保は大変であるものの、実は担当者の視野と見聞、学生のキャリア支援につながる材料集めになる」と指摘しており、今回のインターンシップ先の拡充は、出口である学生の就職先や教員自身にも良い効果を与えることが期待されるものである<sup>2)</sup>。

#### 4-2 教育内容の充実

子どもたちが育つ社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等は、子どもたち自らの将来のとらえ方にも大きな変化をもたらしており、子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている<sup>3)</sup>。まず、キャリア教育に関して、保育士・幼稚園教諭の資格・免許を取得する学生のうち、保育士や幼稚園教諭になる割合が少ないことが課題として挙げられる。インターンシップでは、新たに、本学キャリア支援課の職員（保育所・幼稚園に関する就職担当職員）に1コマを担当して頂いた。その際、保育士・幼稚園教諭の魅力ややりがいを単に伝えるのではなく、学生がその魅力について自ら考えるような指導をして頂いた。

次に、インターンシップをより明確で具体的な目的を持って行うために、事前指導のワークシートを改善し、実際の保育所・幼稚園での子ども達や担任の先生の様子をビデオ学修し、さらにグループワークを取り入れた。その後、子どもや先生との関わりに関する具体的な目標を3個以上設定させた。

### Ⅲ 事前学修の内容とその振り返り

#### 1. 事前学修の概要

昨年度の課題を踏まえて授業構成を改善した。効果のある内容にするために、事前指導の重要性が課題と考えていたので、9回の事前学修と1回の事後指導の計10回の講義の内容を以下のように進めた。また、インターンシップ園に事前のあいさつに行って打ち合わせをした。

- 1回目 教育保育インターンシップⅠについて（体験活動、教育保育実習との違いなど）
- 2回目 DVDを見て学ぶ  
「保育士の仕事と役割について」「幼稚園教諭の仕事と役割について」
- 3回目 多様な就学前教育施設について学ぶ
- 4回目 本学キャリア支援課の職員の講義から学ぶ
- 5回目 先輩達のインターンシップⅠのレポートから学ぶ  
ワークシート「私のインターンシップの目標」を書く
- 6回目 5回目のワークシートをもとに、グループワークをする。  
テーマは「インターンシップⅠで学びたいこと」
- 7回目 0歳児～5歳児の子どもの発達の主な特徴について学ぶ

8回目 各自のインターンシップ先の確認と実習の心得を学ぶ

9回目 活動内容と活動記録の書き方を学ぶ

- ・ 1日に1枚書いてインターンシップ終了後に3日分を担当教員に提出させた。また、実習前に園に行き、実習のオリエンテーションを受けさせた。

10回目 インターンシップの事後指導、アンケート記入。

課題レポート「インターンシップ I で学んだこと、保育実習への課題」を書く

## 2. インターンシップ前の就職希望先

インターンシップに行く前の事前調査段階での学生の就職希望先は、以下のとおりであった。なお、欠席者や未記入者の人数は含まれていない。

- ①保育所・幼稚園・・・39名
- ②福祉施設・・・・・・・・4名
- ③小学校・・・・・・・・4名
- ④その他・・・・・・・・1名

また、それぞれの希望先どの程度定まっているか（確定度）聞いたところ、以下のような結果であった。

- ①希望先は変わらない（100%）・・・・・・・・4名
- ②希望先はほとんど変わらない（80%）・・・15名
- ③変更も十分にあり得る（50%）・・・・・・・・24名
- ④希望先が固まっていない（20%）・・・・・・6名

保育所・幼稚園に行くインターンシップを選択した学生のうち39名（約81%）の学生が将来の就職先として保育所・幼稚園を希望していることが明らかとなった。一方、その希望先の変更が大いにあり得る、希望先の確定度が50%以下の学生が30名（約61%）となっており、半数以上の学生の希望先がこの時点では流動的であることがわかる。

## 3. インターンシップ後の就職希望先

インターンシップ後に同様の調査を行ったところ、学生の就職希望先は、以下のとおりであった。

- ①保育所・幼稚園・・・40名
- ②福祉施設・・・・・・・・2名
- ③小学校・・・・・・・・4名
- ④その他・・・・・・・・1名

また、それぞれの希望先どの程度定まっているか（確定度）聞いたところ、以下のような結果であった。

- ①希望先は変わらない (100%) . . . . . 2名
- ②希望先はほとんど変わらない (80%) . . . 15名
- ③変更も十分にあり得る (50%) . . . . . 27名
- ④希望先が固まっていない (20%) . . . . . 2名

就職希望先は、例えば40名(約85%)の学生が将来の就職先として保育所・幼稚園を希望しているなど、若干の増減はあるものの、ほとんど変わっていないといえる。また、就職先に関する確定度に関しても、希望先の確定度が50%以下の学生が29名(約63%)とほとんど変わっていない。ただし、確定度20%の学生が6名から2名に減少していることから、インターンシップでの経験が、就職先が固まっていない学生に対しては、その経験が就職先を決める材料として役立っていることが推測される。

#### IV 受け入れ先へのインタビューから

実習後、実習先にお礼を兼ねてインタビューに伺い、今年度はじめて受け入れてくださったN認定こども園の園長に5つの質問をした。質問内容とその回答について以下にまとめる。

##### ①日程と時期、受け入れ人数について

- ・9月の初旬であり、時期や人数は受け入れ可能な程度であった。

##### ②学生の取り組みの様子や態度について

- ・担任のいない場所で、子どもがアレルギーの薬を塗ってほしいといい、学生が勝手に子どもに薬を塗った事例があった。大事に至らなかったが、無断で決して判断してはいけない。アレルギー対応は命にかかわることもあり気を付けるよう指導してほしい。また、学生同士で連絡網を作っていなかった。実習時にメンバーと連絡が取れるようにしておいてほしい。

##### ③事前学修で必要な内容について

- ・アレルギー対応や、水・プール遊びの時期でもあるので生命の保持、安全について事前学修が必要である。
- ・子どもに自己紹介をするときの小ネタを用意しておいてほしい。手遊びや歌、得意なことなど子どもが注目して楽しんでくれるように何か準備しておくことも実習には必要である。絵本の読み方も指導をしてほしい。
- ・事前学修としての切り口、「生命の保持」「子ども理解」「職員の職務」の3点が大切である。また、よく質問すること、疑問に思うことを活動記録に書くことも大切である。

##### ④1日目と3日目とでの学生の様子の変化について

- ・3日目には遊び方が慣れてきた。笑顔もよく見られるようになった。

##### ⑤迷惑をかけた事項について

- ・無断で欠席があった。また、給食費について、当日急に実習を欠席した場合でも学生の分も給食がすでに用意されているので、事前に3日分集金しておく方がよい。

多くの指摘があったが、事前指導の内容を再検討する反省材料としたい。特に安全指導に関して

は、アレルギーの内容を取り入れていたものの、実習生としての対応、注意点の指導を徹底する必要がある。また、活動記録は実習先への負担になると思って見ていただいていたが、学生の思いを掴みたいので、活動記録の指導もさせてほしいとのことであった。大きな負担を伴うものであり、指導をお願いしなかったが、様式を工夫し、次年度に向けてインターンシップ先と調整したい。

別の園では、学生には楽しかったと思って欲しいので気になることもあったが言わなかった、どこまで指導したらいいのか迷うこともあったと言われた。実習園ではインターンシップ担当者を配置する体制がない。本来の仕事に支障が出ないように、なおかつ学生への体験学修を意義あるものにしていただくには、送り出す側からインターンシップ I のねらいをもう少し明確に提示する必要があるのかもしれない。

## V 活動後のレポートからの分析

レポートは次の4つの観点からまとめさせた。

- ①子どもとの関わりから学んだこと
- ②保育者の役割、資質について学んだこと
- ③現場でしか得られない実践的なこと
- ④今後の課題

このレポート中から、学生の気づき、学びを以下の3つの項目に絞って考察した。

### 1. 現場の先生へ質問をして学んだこと

事前学修で現場の先生に質問を1つでもしてくるように指導をしていたので、現場の先生からの学びについて記載している学生が数名いた。

まず、Aさんのレポートには、「保育者とは<鳥の目>、<虫の目>、<魚の目>で保育を行うことが大切なんだと教わった。それはつまり、全体を見る<鳥の目>、一人一人を見る<虫の目>、見通しを持ち流れを見る<魚の目>ということである。そんなことが私にできるのかと考えていた。その時保育士さんは、一人一人が今日はこれができたと思うことが毎日1つあるように心がけている。と話された。私は今後は多くの本を読んだり、日々友達を色々な角度から見るなどをしていく中で、少しでも<鳥の目>、<虫の目>、<魚の目>を身に付ける努力をしていきたいと思った」とあり、Aさんは意味深い言葉に触れることができたようだ。

男子学生のBさんは男性保育士に話を聞いている。「ずっと気になっていたことで、ほんとに男性保育士は必要とされているのか、低いと言われている給料で生活はできているのか、正直インターンシップで1番聞きたかったことである。F保育園の男性保育士さんに聞くと、男性保育士の需要はとてもあるし大きな存在だそうだ。しかし、警戒する保護者もいるようで、女兒のおむつ交換は嫌がる方もあるそうだ。私は保護者には信頼して保育所に預けてほしいと思った。給料の面はやはり厳しいと言われていた」給料の面は国も動いており今後改善されていくことを期待したい。

男子学生のCさんは、「子どもと遊ぶことはできるが、注意しても聞いてもらえなかった。とこのことを話すと、男の先生は好かれやすいが一回怒ると怖がられて離れていくことがあるから、得意なことをたくさん身に付けるほうがいと指導を受けた」男性学生にとって現場で働いておられる男性保育士は自分たちの将来への力強い先導役として見ていたことと思う。

Dさんは保育者から「子どもたちの中で一人でもいつもみたいに楽しそうに笑っていないことがあるなら、この教室は楽しく遊べる環境じゃないから生活しやすい環境を作り出してあげることが先生の仕事でもある」と話してもらっていた。保育は環境を通して行うという大切なことを指導していただいた。

## 2. 保育場面でしか得られない学び、努力したこと、難しかったこと

保育者の援助について、Eさんは「一人一人に合った対応をすることが大切。何でも手伝ったら子どもの成長につながらない。洋服のボタンを取ったり、外したりなどの動作で全ての動作を手伝うのではなく、ボタンをはめやすい取れやすいようにするためにボタンの穴を広げてあげるなどの子どもが挑戦しやすい環境を作ってあげることが大事だと思った。子どもに説明するとき、制服のひもを通す「輪」のことを先生は「トンネル」に通そうねと言っていた。子どものやる気が出る表現の仕方をしていた。子どもも「僕トンネルにひも通せるよ」と話していた。言葉の表現を変えることで、子どもたちのやる気が変わったり、想像力が膨らんだりするんだなと思った」Eさんはとてもいい場面を捉えているし、気づきもすばらしい。子どもの自立を促すための保育者の対応が適確に記録できている。

職務内容についてはどの学生にもたくさんの気づきがあった。「表向きではわからない保育者の動きを近くで観察できた」「けんかの仲裁が見れてよかった」「園児が食い入るように絵本を見ていた」「おむつ交換ができるようになった」「子どもと話すときは同じ目線で腰を落として」「たくさんのお子さんから1度に遊びに誘われたが、どのように動いたらいいのかわからなかった」「個々の成長が違うので自分でできることを見守る、助けてあげるなど区別しないといけない」「一気にたくさんのお子さんを見る大変さ」「挨拶の重要性を学んだ。コミュニケーションの切り口」「公園に散歩に行った。行く前は怖かった。でもいろんな工夫をして先生たちは安全に連れて行った」「子どもにとって先生の存在がとても大切で信頼関係を築くことが大切」「子どもが昼寝している時も仕事がある。子どもの記録を書いたり、トイレ掃除、園内の掃除、保育に使う遊具作りなど」「園児にまねをさせてはいけない言葉使いや個人的な感情などは慎むことを心がけたい」「命の大切さを学んだ」「アレルギー対応が見れてよかった」

0歳児クラスでの実習は学生の試行錯誤が垣間見れた。Fさんは「0歳児クラスで人見知りする子どもが泣いてしまった。初めは目を合わせないように接していたが、それでは子どもとの距離を縮めることができないし仲良くなれないので、少しずつ近づいてもみようと、最初は遠くからボールを転がしたりおもちゃを振ったりした。その段階で泣かずに楽しくしてくれた。人見知りがなくなったと思ったが、次の日になるとまた泣いてしまった。だが、1日めほど苦戦はしなくて、絵本



を読んであげるとすぐに泣き止んで仲良くできた。そういった、子どもとの接し方一つ一つを大切にしていけないといけないことを学んだ」Gさんは「0歳児クラスで人見知りされてショックだった。泣かれて子どもや先生に迷惑をかけた」Hさんは「0歳児にミルクを飲ませてあげた。はじめてで哺乳瓶の角度などが難しかった」このように赤ちゃんを身近に見ることがない学生にとって冒険のような体験ではなかったかと推測する。事前学修で乳児保育について指導が必要かもしれない。

Iさんは保育者の喜びについて、「水が苦手だった子どもが自ら水で遊びだしたところを見た。その時成長した子どもを見てとても感動した。小さいことでも子どもができるようになると、こんなにうれしいことだと改めて思った。保育者のよさを実感した」と書いている。また、JさんとKさんは安全・危機管理について「1歳の女の子が泣いていた。行ってみると頬に歯形がついていた。しっかりと子ども一人一人を見ていなかったせいで、子どもの顔に傷がついてしまった。子どもが傷ついてしまってからでは遅いということがわかった」、「お昼寝の時間も子どもは安全ではない。寝返りを打つと口元がふさがり息ができなくなってしまう。とても危険なことでお昼寝の間も子ども達を見てあげることが大切であると感じた」と書いている。

Lさんは「3歳児は想像以上に手先が不器用だった。不用意にはさみを渡してはいけない。子どもにはさみを取ってと言われ渡してしまった。渡してはいけないと先生に注意された。私は子どもたちに対して安全を確保するという自覚が足りなかったと気づくことができた」と書いており、この視点は現場に行かないとわからない。また、この点は、事前の指導が行き届いていなかった。子どもとの触れ合いから手ごたえを感じた学生もいた。「ミニオンの名札を作っていて人気者になった」、「子どもからまたきてやと言われて暖かい気持ちになった」等、子どもの姿に学生は嬉しい気持ちになったと推測する。

子どもの発達理解についても目の前の子ども姿からの学びがあったようだ。「発達過程を理解し、年齢別にも一人一人にも合わせて声掛けや対応が大切だと分かった」「言葉が出ない1歳児が絵本にくぎ付けになっていて驚いた」「3歳児は言葉を使って話すことが楽しい」「0歳児は自分で話すことは出来ないが、体で表現している」「1歳児は一人で食べていた。1年の差は大きい」「年齢が小さくなればなるほど子どもたちの1年はとても大きい」「同じ年齢でも発達に差がある」等、これらは、大学2年生からの講義で実際の姿を思い浮かべながら確かなものにつながっていくことであろう。

### 3. 実習への課題

どんなことを来年の実習までに身に付けておくのか、また大学で学んでおかなければいけないのかなど、具体的な内容の記載が多くあった。インターンシップIにおいて、保育の現場に対する具体的なイメージが持てたこと、自分が保育者となって子どもと関わる時に何が必要か、何が足りないかを書いている。

まず、「手遊びのレパトリーを増やしたい。園児が集中できない時は、手遊びをするとすぐ静かになった。手遊びは武器になる」「ピアノの練習をしておく。弾き歌いができるようにしてお

く」「折り紙やあやとりを覚える」「子どもと何を話せばいいのかわからなかったので子どもが好きなことを調べておく」「絵本が上手に読めなかった。子どもが最後まで集中して聞いてくれなかったので、上手に読めるようになりたい」「午睡の時スムーズに寝かせられるようになりたい」「おむつ交換がうまくなりしたい」など保育者の姿を見て、技術力の向上を意識していることがわかる。

次に、「子どもが何をしてほしいのか、何が嫌なのかを読み取るのが難しかったので、子どもの気持ちが理解できるようにしたい」「体調や安全確認など命に関わることなので細かいところが見れるようになりたい」「子どもを褒めたり、悪いことをしたらなぜろれがいけないのかを教えられるようになりたい」「ボランティアに参加したい」など子どもをよく理解するための経験が不足していると感じていることがわかる。

中には、「同じ年齢でも発達に差があるし、子どもの1年はとても大きいので、園児が何ができるのか勉強しておく」「もっと積極的に子どもとかかわる」「子どもとうまくコミュニケーションがとれるように、話術や子どもへの声掛けを磨きたい」「子どもの注目を集める話し方をしたい」

「全体を把握する、見る力をつけたい」「心理学の授業を復習しておきたい」等、内容が保育実習に行った2年生と同じようなものもあり、学びを積み上げることが重要であると気づかされた。

乳児クラスに入った学生の中で、人見知りをされ、泣かれて自分には向いていないと思った学生がいたので、人見知りは乳児にとり当たり前のこととして実習に臨めるように、乳児の発達理解や、乳児保育の楽しさを伝えておくことが必要かもしれない。

このようにわずか3日間ではあるが、学生は様々な学びをしていることが読み取れる。保育場面で子どものこと、保育者のこと、自分の動きなどを新鮮な気持ちで受け止めている。学生にとって心が動く瞬間が、感性を豊かにすることにもなる。そのことが学生に育てたい保育者に求められる重要な資質である。

## VI 効果と課題

インターンシップ I による効果の第1としては、学生の保育実習への期待を高めることである。そのために、インターンシップ前に目的を持たせた指導を試みたが、その効果が現場の先生への質問や、振り返りによく表れていた。2年生以降のより専門的な学びへのモチベーションの高まりが感じられ、保育現場の経験を基に、大学での専門科目への学修につなげることができると考えられる。金岡によると、「インターンシップ後には、『大学の勉強に力を入れるようになった』『具体的な次の目標に向けた学修を始めた』等、汎用能力の育成と共に大学で学ぶ専門性について学生が課題を見つけ、大学での学修に繋げることができるようになっている」とあり、インターンシップの学修は、専門科目の学修意欲に影響する<sup>4)</sup>。また、保育実習を体験することで、相互に補完し合ってより専門的な実践能力の構築につながることを期待される。

第2としては将来の職業として、保育者は「カッコいい」と思い保育者になりたいという職業意識を高めることである。そのために、キャリア支援課との連携による事前指導を行った。前述の通り、就職先が固まっていない学生に対する効果があったと推測されるが、その効果は一定程度に留

まっていた。事後レポートから、保育者への質問や、子どもへの関わりの姿を見て、自分の今のままではいけないという具体的な目標を持った学生もいたことから、キャリア意識の向上が伺えたが、実際の就職先となると、小学校実習や施設実習に行ってから決めたいという意識が伺えた。

課題の一つとして、インターンシップ I の教育内容をどのように明確にし、定着させるかである。今回教員の課題として、N認定こども園でのインタビューで言われた事前学修に次の3つの切り口「生命の保持」「子ども理解」「職員の職務」が必要であること。手遊びや絵本の読み聞かせなど実践的な内容も事前学修で指導しておくことも求められた。今後、インターンシップでの効果をより深めるための事前指導の在り方として教員により示唆をいただいたと思う。大学と保育現場が学修の目的を共有し、学生指導を連携して行うことで効果のあるインターンシップになると学ぶことができた。

事前学修の時間が限られる中、安全指導など最低限必要な内容を加えつつ、学生の意欲を高められるような指導内容の検討を継続して取り組む必要がある。

#### <引用文献>

- 1) 文部科学省『インターンシップの推進に当たっての基本的考え方』（2014）  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/04/18/1346604\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/04/18/1346604_01.pdf)
- 2) 池田憲彦「インターンシップ教育の無限の可能性と課題：事前教育の効果に関する一考察」『日本インターンシップ学会年報』（12），25-31，（2009）
- 3) 「第1章キャリア教育とは何か」『高等学校キャリア教育の手引き』文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/1312816.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1312816.htm)
- 4) 金尾敬子「キャリア教育科目におけるインターンシップの教育効果に関する一考察」『四天王寺大学紀要』第64号（2017） P167～177

#### <参考文献>

- 1) 小野奈生子・山田鋭生「教員養成課程における『現場』体験の重要性について」『共栄大学研究論文集』第15号（2017）
- 2) 成田信子・森田健「『教育保育インターンシップⅡ』の現状と課題－保育所・幼稚園の場合－」『関西国際大学研究紀要』第10号（2009）

## Abstract

Internship is important as an introductory subject for students who have enrolled with the ambition of working in pre-school nursery / educational facilities. In addition, this subject has the role of a platform for experience in order to become aware of the necessity of studying specialist subjects. Based on the fact that there is a low ratio of students who choose nursery nurse / kindergarten teacher as a career, it is necessary, through internship experience, to create an educational course in which students can work towards becoming nursery nurses / kindergarten teachers with confidence. Therefore, this study discussed the newly incorporated preparatory study and its results and inspected its future nature.

By improving preparatory study, it was possible for students to approach internships with goals and conduct autonomous activities. In addition, in a survey of preferred career before and after internship, it was discovered that 80% of students wanted to become nursery nurses / kindergarten teachers. Meanwhile, it was also discovered that approximately half of the students thought that it was possible that their career choice may change. For this reason, it is considered necessary to continue to include contents that incorporate a career education perspective in subjects such as practical education from second year onwards.